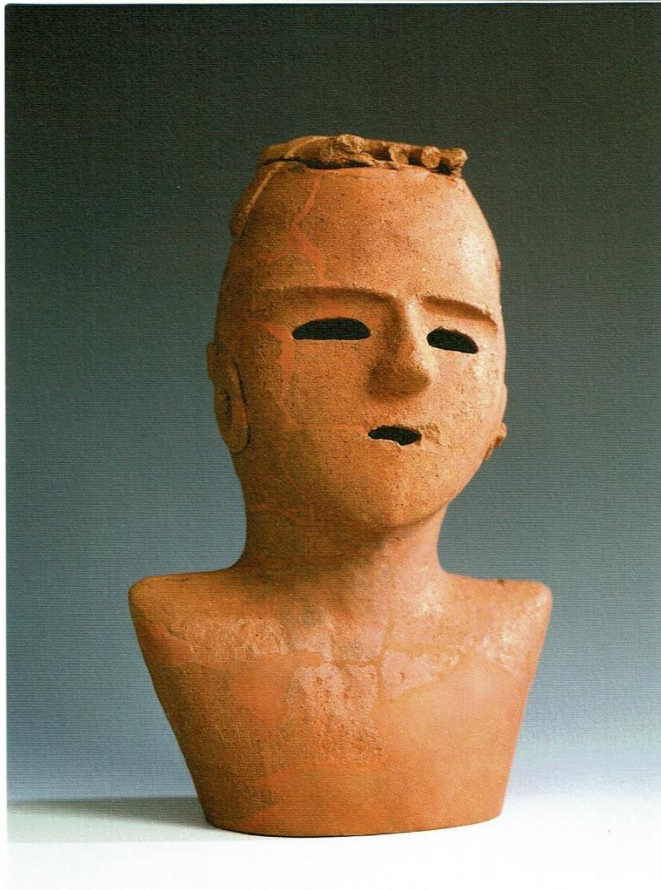


2022年三水会

埴輪のほほえみ



(千葉県芝山町はにわ博物館の展示品)

2022年3月16日発表

野口幹夫

はじめに

1) 古墳との遭遇

小学生 5 年の昭和 20 年春、空襲被害を避けるため、大阪市内から大阪南の田舎、古市誉田の農家に一家をあげて疎開した。通った古市国民学校は、今白鳥小学校と名前が変わっているが、近くにヤマトタケルの白鳥陵があり、そこからその名をとっている、また家の裏は大きな応神天皇陵古墳があった。所謂河内古墳群の真っただ中であつた。しかしそれらはうっそうとして不気味な場所というだけであつた。

2020 年 7 月 1 日コロナ禍の中の GOTO キャンペーンにそそのかされて、湯檜曾に連泊しながら群馬の古墳群を訪ねたときの驚きはただならぬものがあつた。それで続けるように 8 月には下総の国にある古墳群はにわをみる旅をおこなつた。成田空港近くの芝山町はにわ博物館で見た「埴輪のほほえみ」が問いかけるものは、そのままにはしておけない深い意味を持ったものであつた。これはその探索のレポートである。

2) 日本原記の完成

2008 年に出雲大社を訪れたときの好奇心から日本原記の旅は始まつた。数多くの縄文遺跡を、北は北海道から南は八丈島まで訪ねた。最新の遺伝子調査による学術的知見はバラバラだつた観察記録を一本の筋を与えてくれ、2019 年には日本列島 2 万年の歴史が、いかに現在の我々の存在につながっているかを「日本の精神風土の形成」としてまとめることができた。さらに翌年には能楽を通じて縄文から現代の芸能までも見通せた。正統的史学から見れば、独断的で偏見史観であるとは思ふが、そのユニークなところを評価してくれた亡き畏友村尾行一教授から野口史学と名付けられ恐縮した。

この埴輪論はこれまでの野口史学が縄文・弥生で終わっていたのを、あと 3 世紀分延長したものある。即ち弥生時代から古墳時代までである。日本列島で起きたこの激動の時代を、日本は世界史的に比較して見て如何に幸運であつたかを「埴輪」が語っていると考へた。私の恣意的な史論の締めくくりが、幸福論で終えることができたのは幸せである。

～目次～

- 1, 縄文から弥生時から古墳時代への歴史的大変換
- 2, 埴輪のほほえみに出会う旅
- 3, ここに埋葬された王はどんな人たちか 指導者の威力に感謝
- 4, ストーンヘンジの悲劇との比較
- 5, 埴輪のほほえみは消えていった。
- 6, 結び

九州博物館メルマガ第67回に、私の題名と同じ「埴輪のほほえみ」と題する一文を見つけた。河野 一隆氏の文である。

「アルカイクスマイルと言うのはギリシャ彫刻に対する形容かと思ったら、日本にもあった。今から1千年以上前に作られた粘土の造形、人物埴輪である。と言っても、日本の埴輪の場合は、目や口をヘラでアンズ形に切り抜くことで、結果的に「スマイル」になるのだが、この写真に写っている埴輪はどうだろう。口を凹形に切り抜いているから、まさに「大爆笑」に近い。こんな埴輪を作った人たちは、さぞかし毎日が幸せだったのだろう。

この埴輪、宮崎県の百足塚古墳という6世紀の前方後円墳から出土したもので、文化交流展室「神話のふるさと 日向の考古学」のコーナーで公開中である。ぜひ会いに来て、幸せのおすそ分けにあやかりたい。」



1. 縄文・弥生時代から古墳時代への歴史的変換

野口史論として、これまでに書き留めた「日本原記」を簡単に要約する。

4万年前大陸からはみ出して生まれた日本列島弧は、出来あがった頃は、樺太と北海道、朝鮮半島と北九州で大陸と地続きであった。そこにD2の遺伝子を持った人類が朝鮮半島から、C3遺伝子の人類が樺太経由で北海道に入ってきた。日本列島はすべて地続きであった。この二つの人類は融合し縄文族となった。その後日本列島は大陸から切り離された。1万年以上この地は縄文族で純粋培養された。幸い海の幸・山の幸で食料は豊富であったので、争いは無く交流し合い、縄文語が生まれた。太陽と自然を崇める祭りをを行い、土器の芸術で飾り 仮面をつけた祝祭芸能を花開かせた。

1万年前、気候変化で北方民族の南下で圧迫された中国江南の農耕文化民が逃亡先の一つとして日本列島に来たのだ。彼らの遺伝子はO2bである。縄文人は稲作と鉄器の先進文化もった彼らを歓迎し、学び、崇めた。弥生時代である。その弥生部族の中に出雲に拠点を置いた出雲族は力をつけ、奈良まで進出した。また北九州にも多数の小国を開き、その最有力国は大分県の宇佐を中心にした卑弥呼を女王に持つ邪馬台国であった。

そして3千年前、朝鮮半島を経由して今度は北方騎馬民族が渡来した。おそらく燕の国の亡命王の流れであった。彼らは周王朝の思想の元、天命をもって建国治国の夢をもっていた、そしてこの列島にその夢を果たすため渡来した。遺伝子はO3であり天孫族と名付けよう。彼らは馬と鉄を持ち、国家経営の技術と思想を持っていた。それらを持っていなかった弥生族、縄文族は、この天孫族を素直に受け入れた。しかし彼らが戦勝国として更なる制覇を目指して乗り込んだのではなく、負け組の亡命政権であったのが幸いであった。天孫族はその支配の実現のために、武力は使わず、現地の人民と融和しなければならなかった。自分らの言語を捨て縄文語を受入れ学んだ。逆にそれを漢字で表現することで初めて記録できるようにし、文化を豊かにした。後の世に万葉集を生み出す基礎をつくった。そし

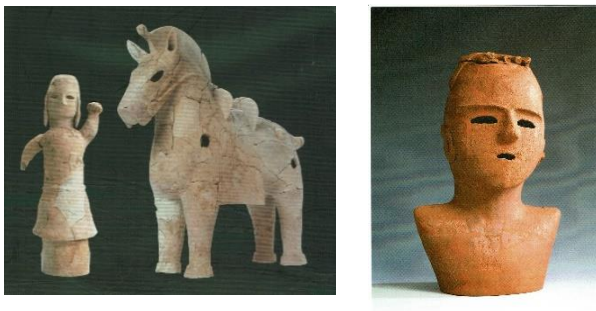
て武力でなく威力と連携策で支配を進め、紆余曲折はあったが比較的短期間で制覇を進め、ついに3世紀の末、橿原の宮でヤマトの国の建国を宣言したのである。

しかしそこからその政権を列島全土に拡大し認めさせていく仕事があった。既に天孫族は単独ではなく、弥生系の豪族たちと連携しての連合政権をつくっていた。農業指導者であった弥生系の豪族は大和政権と連携しつつ、それから3百年5百年かかって、日本列島を徐々に農業国家に上げていった。水稻栽培に至る道は強力な指導力がなければできない。大和政権との結びつきはその指導に威力を付け加えた。人民層をなしている縄文族は、日本列島が温暖で食料には恵まれていたとはいえ、狩猟採取の生活よりも安定して豊かになったのである。彼らはその指導者ぶりを歓迎し、支配者をあがめた。民衆の歓迎ぶりを象徴するモニュメントが巨大古墳であり、埴輪なのである。その時代を古墳時代と呼ぶのだ。

埴輪を生んだ技能者群は縄文人たちだ。彼らは縄文1万年の間に優れた芸術品を残した。火炎土器や縄文土偶だ。彼らの技量が埴輪にも結実した。発掘された土偶の表情と見比べて、その人間描写の変化を見てみよう。



縄文土偶は無表情か、何か思い詰めている。埴輪には解放感がある。



2、埴輪のほほえみに出会う旅

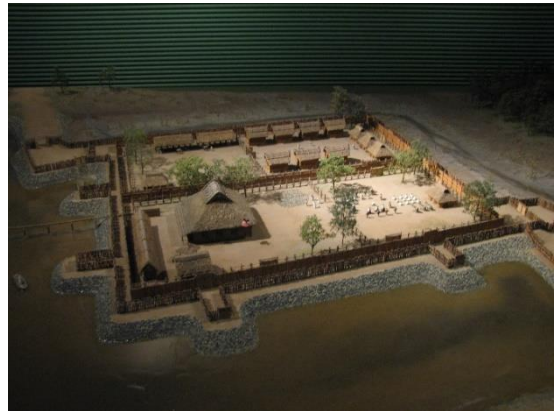
2-1 群馬保渡田古墳群を訪ねる旅

高崎市にある**保渡田古墳群**と**かみつけの里博物館**をみた。

5世紀、ここには有力な地方王権が栄えた世界があった。広大な水田が開かれ、集落は豊かであった。王は王権のシンボルとして自分が葬られる丘陵墓を作った。設計はヤマトから土師氏が派遣された。この建設には当時の技術の粋と人力が結集された。巨大な前方後円墳の玄室には何もないが、墓の外延部には大量の埴輪人形が配置されていた。

それが突然の榛名山の噴火火砕流ですべてのみこまれて、ポンペイの日本版となった。それが幸いしてすべてがそのままの配列で発掘されたのである。

博物館の前には巨大な八幡塚古墳が再現さ



れていた。登ると頂上から博物館黄一帯が見張らせる。後円部の頂上には石棺のある墓穴が再現されている



古墳の頂上から博物館を見下ろす。
前方後円墳の外周部に埴輪の一群がいた。



指揮者がいる演奏団！



博物館内にも多種の埴輪群があった。



2-2 芝山町 埴輪博物館

成田ビューホテルに泊まり、成田空港の横道路を縦断すると芝山町だ。町に入るとあちこちで埴輪が迎える。芝山はにわ道と名付けられている。馬を引く人と、背の高い山高帽にほほ髭の人物は異様で目を引く。

町のはずれに芝山町はにわ博物館がある。

玄関にも、ひときわ目立つこの人物像が立っ

ている。ユダヤ人埴輪と称される埴輪だ。このユダヤ人埴輪が特徴的なのは、まずその相貌が精緻にユダヤ人の特徴を示していることであり、ほかの埴輪が単純化されシンプルなのだが、これは極めて入念な細かい細工を施されていることだ。この点は埴輪の存在意義を考える点でもヒントを与えているので後で詳しく検討する。



この博物館に入室すると古墳の由縁が揭示されていた。

古代において死は身近であった、縄文時代は集落の中に埋葬され、弥生時代になると集落の外に墓域を作った。古代人は、死は肉体と靈魂が分離することと考えていた、

人が死ぬと残されたものは必死に靈魂を肉体に呼び戻そうと祈り、儀式を行った。もがりである。

特に首長・リーダーの靈は特別でした。受け継がれないと共同体の存続が危ぶくなると考え、特別な行事が行われた。土を盛り上げ形見の品々をさ

さげた。

それは悲しみであり魂鎮めであるがまた遊びでもあった。新たな指導者のに受け継がれて生活が続く喜びでもあったのだ。

古代人の思いへの共感と感動時代を越えた感性を持ちたい。

この若い女性の埴輪のまなざしや語り掛けそうな口元に何を感じますか？



とあった。私もこの埴輪女性のほほえみに感銘を覚えた。これに代表されるようにこの博物館の埴輪た



ちすべてが穏やかな表情を持っている。先に述べたユダヤ人埴輪を例外として、すべて一刀彫のようなシンプルな形相の中に、穏やかな安心感のある顔をしているのである。縄文土偶に見られる緊張した恐ろし気な顔とはおよそ正反対の、のんきな顔、笑っている顔なのだ。

この町の人たちは埴輪をまねて毎年 11 月には、はにわ祭りをする。その衣装と扮装が展示されている。



博物館を出ると前の公園にもユダヤ人と馬の埴輪群があった。



芝山古墳群に出るユダヤ人埴輪は何を示すのだろうか。2019 年に出版された考古学者田中英道の「発見！ユダヤ人埴輪の謎を解く」によれば、この姿は、まさしくディアスポラで世界に拡散したユダヤ人の姿である。先にも述べように、ほかの人形埴輪に比べて、造形が細かく、現在も続くユダヤ人の特徴を描き出している。

彼らは、ウイグルカザフスタン付近にあった弓月国から中国を経て我が国に招聘されたユダヤ人であった。医術や財政などの術にたけていた。秦氏としてその名を残している。後世になるが聖徳太子の後見人として、また能楽の支援者としてその名を残した秦河勝もその一人だ。彼は秦の始皇帝の末裔と称したそうだ。ネストリウス派のキリスト教景教を中国にもたらしたのも

彼らだ。

芝山古墳のユダヤ人埴輪は、後世に秦氏として大和国の貴族として和風と同化する前の、渡来直後の純粋のユダヤ人としての姿のまま、この地の指導者として存在したという貴重な証言なのだ。彼らはその出自からして決して権力者ではなかった。

3、ここに埋葬された王はどんな人たちか。

古墳時代は3世紀から6世紀をさし、大和王朝政権が王権の形を整えながら、東に支配力を及ぼしていく時代である。支配者としての権威を示すために巨大な前方後円墳を作った。そして大和王朝に仕える地方王族にもこの形の墳墓をつくらせた。この時代に各地に前方後円墳がつくられるのである。王たちの宝物である刀剣や飾り馬具などが埋葬室に残されることと、供え物を載せる円筒埴輪が並べられることまでは、全国各地の古墳に共通しているが、人型埴輪は分布は一様でなく主として東北に偏っている。

そこに注目して王権の支配の在り方に差をみいだせるのである。

まず前節に述べた保渡田古墳群（かみつけの里博物館）から見ていこう。

ここは1500年前、榛名山は2度の大噴火を起こした地である。「怒る峰」の記憶は今もこの地の地名イカホ（伊香保）の名前に刻まれている。榛名山の噴火は激しい火砕流と土石流となり、麓の村を一気に埋没させた。イタリアのヴェスピオ山噴火とポンペイの悲劇がここにもあったのである。榛名山噴火では幅3km長さ5kmが埋没 深さ4mの地下に沈んだ。それが20世紀になって高崎市三ツ寺町の上越新幹線工事で初めて発見された。始めに発見されたのはこの村の王の館跡であった。それからこの地全体の遺跡発掘作業が進められ、村とその広大な耕作地、さらに壮大な王の古墳群が発掘されたのである。

ここに葬られた王は、博物館の解説書によれば、この地の有力豪族で、後の上毛野氏の祖であろうとしている。さらにその祖は崇神天皇で、その子豊城入彦を東国支配に派遣したと日本書紀の記載を紹介している。つま

りこの豪族は天孫族の子孫とみているのだ。崇神天皇は神武天皇ほど有名ではないが、歴史的研究によれば、彼こそは実在した初代の天皇ではないかとみられている。つまり神武から崇神までの9代の天皇の名は歴史を引き延ばすために神話的に創作された人物とみられるのである。いずれにせよ天皇の名は後世の贈り名だから、神話の神武天皇は、本当は崇神であるかもしれない。とすれば、彼は中国の北方王朝である周の一氏族である燕の王朝が秦に滅ぼされて、その亡命政権が朝鮮半島を経由して倭国に苦勞して入国して、奈良までその支配を打ち立てた人物なのかもしれない。彼らは天命の思想を持ち、自らの支配を天命により受けたものと信じて、倭の国に新国家の建設を夢見て倭国に渡ってきたのである。先に支配していた江南の弥生族豪族たちを、鉄と馬と統一力の権威で懐柔し、統一国家倭国を3世紀に樹立した。神武とは実はこの崇神天皇のことだった可能性が高い。彼はその統一の仕事の続きとして、自分の子孫を東北に向かって派遣した。

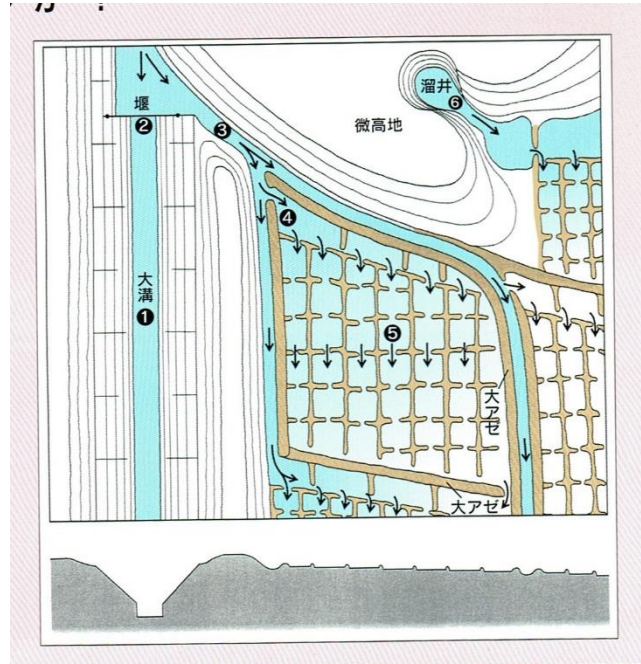
彼らの支配樹立のために武力は必要なかった。権威の象徴である鉄器と馬を持ち込み、我らこそ統治の主であると宣言すればそれでよかった。周王朝から受け継いだ統治の術にはたけていた。巨大古墳の建設はその権威の象徴であり、権威を知らしめる手段でもあった。ヤマトに始まり各地に規格を決めた古墳をつくらせた。

天孫族はその権威力でもって、各地方にバラバラであった縄文の民や、米つくりの方法を教えて小集団を先に作っていた弥生族指導者を味方につけて、一挙に大規模な灌漑と田つくりを指導した。

当時日本列島は、温暖な気候で、深い森林におおわれていて、縄文人はそこに狩猟採取の場を見出していた。しかし森林地帯は農耕には適さない。したがって拠点としては深い森林を避け、例えば榛名山の山懐のようになだらかで森林でなく川が流れている平坦な地に民衆を集めた。群馬県の山あいにはそのような適地は多かった。

このようにして天孫族の統率による大規模な農業地の開拓が進んだのである。この図は榛名山山ろくの噴火埋没地から発掘された当時の田である。

この事業は縄文族の民衆にも、指導者の弥生族にも歓迎された。縄文族には食の安定が保証されたし、弥生族にとってもこれだけの大規模な事業を、権威をもって進めることは無理であり、その事業に高い地位で



働く技術者の役割に甘んじることができたので喜んで協力した。天孫族と江南弥生族との連携は後世まで続いていく。

天孫族統率者として臨んだ王は農作業の閑期に民衆に大規模な仕事を与えた、それが前方後円墳の築製である。王の墓として、形の設計図は本拠地大和から受け継いであった。民衆は営々としてよろこんで働いた。作業の報酬は当時得難い鉄の農機具であったり、牛馬であった。

さて4世紀になりヤマト以西の西日本では大和朝廷の政権は確立し、さっそく大和政権は朝鮮半島の紛争に巻き込まれていく。仲哀天皇一神功皇后の時代九州南部にも朝鮮半島の紛争に便乗して反乱がおきる。磐井の乱である。神功皇后は身重の身を案じながら夫と共にヤマトを離れ、九州から半島にむかう。このようにヤマト本拠地では軍事力が必要ではあったが、東北地方はまだ統一の途上である。ここかみつけの国にはまだ租税の制度も徴兵の制度もまだ導入されていないであろう。余剰農産資源は民衆への配分に当てることができた。為政者は王としての威厳は見せているが、民衆に近い存在で、むしろ人気者であった。民衆はよろこんで、王が活着しているうちに作る彼のための陵墓の建設に参加したのだ。供え物として埴輪をつくった。始めは供え物の形円筒埴輪を並べた。そのうち人形埴

輪を登場させた。集団としてよろこんでいる自分たちを人形として参加させたのである。埴輪人形の表情はすべて屈託がなく可愛げで、希望の微笑みを見せている。

為政者たる王がこのように民衆から慕われ死後も人形の微笑みを贈られるよう時代は、この 300 年の奇跡的なことであった。

それはいろいろの条件がそろっていた。まず天命に従う天孫族は、徳による仁政を、同盟の弥生族にも、また働く民衆の縄文族にもみせる必要があった。一方弥生族も水稻の技術は持って伝えてはいたが、大規模な灌漑施設設置のためには、それを指導する権威が必要であったので天孫族の権威付けを歓迎した。

縄文族民衆はこれで不安定だった生活が安定し豊かになったのだ。

この 3 つの条件がそろった時代の奇跡だったのだ。

芸術的才覚に恵まれていた縄文人たちはこれまで多種多様の縄文土偶を制作してきたが、その表情は真剣であったり異様であったり決して朗らかなものではなかった。その才能を駆使して、天真爛漫の表情を持つ埴輪土偶として開花させたのである。

この奇跡が日本列島に起きたのは、ある意味で、歴史的偶然というしかない。孤立した文明へ別の先進的文明が侵入する場合は日本列島のこのケース以外では大抵悲劇が起きた。その一例として同じ島国の独自文化を花開かせてきたブリトン人社会に大陸からのビーカー人が侵入した時の悲劇を次に見ていきたい。

5, 古代ブリトン島の悲劇との比較 ストーンヘンジの謎



古代ブリトン人は石器技術に秀でていた、巨大な石の精緻な加工をする技術を持っていた。ブリテン島に 1000 個もの巨石遺跡がある、それぞれの地方で競うようにモニュメントを作っていた。島の最北端が発祥の地である。

約 5000 年前、各地のブリトン人が集まって、太陽の夏至を祝う巨大なストーンヘンジをつくった。そのため集落も作り、数年かけて完成させた。石は平等に入る材料なのでこの社会は基本的に平等社会であった、住まいも石で作った。狩猟採取と農耕を併用していた。

ストーンヘンジが完成した BC3000 年から数百年後、突然古代ブリトン人は姿を消した。その頃大陸から鉄文明をもつビーカー人が侵攻してきたのだ、彼らはブリトン人と交わることなく交替してしまった。それは遺伝子研究の結果



判明したことである。ビーカー人の遺伝子は今の英国人に残っているが、古代ブリトン人の遺伝子は残っていないのだ。

ビーカー人には免疫がある病原菌が持ち込まれ、それを持たないブリトン人が感染し病死で壊滅したのかもしれない。石器技術で高い文明を築き、誇り高いブリトン人には、侵入者を受け入れず、敵対したので、鉄器文明の武力をもつビーカー人が武力で完全制覇したのかもしれない。

史料が何も残っていないので真相は不明だが、絶滅という悲劇があったことは確かだ。

日本における縄文から弥生への平和的移行とは全く違った歴史変化をたどったのだ。

6、埴輪のほほえみは消えていった。

埴輪のほほえみは消えていった。原因は支配者の権力化である。その先例を示す例が近くにある。埼玉県の名前の起源となる「さきたま古墳群」である。先に見た群馬県の高塚古墳群よりも大きな古墳群である。それは埼玉県のほぼ中央にあって9つの古墳が集中している。



この9つの古墳の中で最初につくられたものは最も北にある稲荷山古墳である。5世紀後半につくられた。ここからは考古学上の大発見である金錯銘鉄剣が発掘された。その金象翫文字からこの墓に葬られた王は大和王朝の雄略天皇に仕えた有力貴族であることがわかった。このことからこのさきたま古墳群に葬られた王たちは群

馬や芝山の王たちと比べると、大和朝廷との結び付きが強い支配者たちであった。

ここからは「ほほえみの埴輪」は発見されないのである。埋葬品は当時の渡来飾りや馬具などが主で、人物埴輪はあるが、盾持人埴輪のような強面のものである。

それは大和政権の天皇のなかでも特徴的な継承をした継体天皇陵とされる今城塚古墳でも同じことがいえるのだ。

天皇陵は発掘調査ができないので、はっきりしたことは言えないが、この継体天皇陵は例外的に多くの埴輪が発見された。特に3層建ての巨大宮殿の埴輪や、巫女集団 力士や武人の行列が備えられていたことが確認された。しかしそれらは硬い表情でほほえみはないのだ。

さきたま古墳群と継体天皇陵で見ると、人形埴輪は存在するが、彼らは葬られた王に親愛の情を示してはいないのだ。

さらに6世紀の終わりには前方後円墳などの古墳の築造もなくなり、古墳時代が終焉する。

7世紀大和朝廷が熾烈な内戦の末、天武王朝が日本国を樹立した時、全国に国司制度ができ、防人の徴集と軍事費のための過酷な税金取りが始まる。巨大古墳の築造の意味もなくなり消えていった。支配のための国家制度が全国的に整備されたからである。埴輪も消えた。

そして7世紀には全国支配をおさめ、同族内の反乱を抑えた天武天皇の武力制圧によって、天孫族の国家形成は完成した。

国家が確立したのは大陸の諸国との関係である。朝鮮半島の武力抗争に参加することで、軍事力を持たねばならず、全土からの税金と徴兵が必要となった。それを実現するためにはこれまでの「威力」融和政策でなく、「権力」支配の国家日本への移行が必要であった。

天孫降臨神話の古事記日本書記が作られ、ゆるぎなき正統化が行われた。国家財政の納税徴収のための行政組織が生まれ、軍備のための徴兵防人制度も生まれた。

ここに古墳時代は終わり、「埴輪の微笑み」も消えたのである。

6、結び

埴輪研究の第一人者である若狭徹明治大学教授はその著『埴輪は語る』（ちくま新書 2021/6）の結びにこう書いている。『埴輪は、歴史に関心をもたない市民にも人気である。歴史に関心をもつための入口に、埴輪の「カワイイ」があることを大いに歓迎する。しかし埴輪の笑いは「喜びの笑い」ではない。』と書いておられる。これまで述べてきたように、確かにさきたま古墳や今城塚古墳の埴輪のように無表情でまじめな表情の埴輪も多い。

しかし古墳時代のある時期、ある地域では、その墓地に葬る指導者に対して、限らない感謝をささげた「ほほえみの埴輪」が作られ飾られたことも見てきた。また当時渡来直後で民族の姿そのままであったユダヤ人指導者には、限らない敬意をこめてその姿を埴輪として残した。

それは歴史上で見てほんの一瞬、またローカルな出来事であったかもしれないが、そこに残された人間の喜び 幸福感が、埴輪として結実したことの意味は大きい。それはそこに埋葬された王は、従者に満足な生活を提供し、従者から尊敬と親愛の心をささげられたことを示している。そのような指導者が存在しえた歴史的條件が当時日本列島に生まれたことを示しているのである。そのような歴史を持っていたに日本列島に祝意を言いたい。なぜなら…

人間は未熟でいつも指導者を必要としている。人生の節目によい指導者に巡り合える人は幸いである。心の指導者は偉大な宗教者として 1000 年に一度現れた、ブッダでありイエスである。社会の組織指導者も又貴重であるが、簡単には現れない。この古墳時代のある地方には、王と特権指導者というその時代ならではの形態ではあったが、良い条件に恵まれてその理想的な指導者が実現したのである。その条件は縄文人弥生人天孫族という平和な組み合わせの中で生まれたことをこの埴輪のほほえみは語っているのである。